

在特会の論理（1）

—— 拉致問題で「舵が切りかわった」A氏の場合 ——

樋口 直人

1. 問題の所在——日本における極右運動

日本に右翼はあっても極右はない——正確にいうとゼノフォビアを前面に出した排外主義的な社会運動は実質的に存在しなかった¹。ところが、在日外国人を明示的な標的とする極右運動が2000年代になって現われるようになっていく。これらの運動は、単に「外国人」という欧州の極右と共通する敵手を設定するだけでなく、旧来型の右翼のような組織的基盤のない、「市民運動」に類似した個人の緩やかな集合である点でも新たな性質を持つ。

そうした運動の新しさや特質については徐々に論じていくとして、本稿を皮切りとする一連の研究ノートでは、2007年に設立された「在日特権を許さない市民の会（以下、在特会）」の活動家に対する聞き取り記録を掲載していく。在特会は、会員数1万人超に達しており、新しい極右で最大かつもっとも知名度の高い団体である²。「普通の若者」を街頭に動員し、在日コリアンをはじめとするエスニック・マイノリティに対してヘイトスピーチを浴びせかける様子は危機感や好奇心を引き出し、在特会を追ったルポルタージュが注目を集めるに至っている（安田 2011a, 2011b）。

筆者は、石原慎太郎・東京都知事を日本型極右政治家とみなして支持基盤を分析するところから、西欧との比較を念頭におきつつ極右研究に着手した（松谷他 2006）。同時に、外国人参政権の研究を細々と進めるなかで（樋口 2001）、なぜ日本で参政権がこれほど政治問題化されるのかに関心を持つようになった（樋口 2011）。本稿はそうした関心の延長線上にあり、日本的な極右運動の特質を生み出すものを探求するための一里塚である。

理論的背景や在特会そのものの紹介は、本稿に続く原稿で行うとして、ここでは調査について述べておく。在特会では、2010年末から取材は許可制をとる

ようになり、調査に際しては「取材協力費」を支払うことが受諾条件となっている。筆者自身が請求されたのは、1人2時間を目安として1万円というものだが、在特会事務局の判断で一定の減額がなされる。そうした条件のもとで、2011年初頭から調査を依頼して聞き取りを進めていった。

本稿執筆時点で在特会と関わりがある活動家12名に対して聞き取りを行っており、そのうち9名は在特会を主な帰属先とする活動家、残りの3名はそれ以外の団体を主な帰属先としている。聞き取りに応じてくれたのは、いずれも自らが属する団体の積極的なメンバーであり、イベントがあると単に参加するだけでなく、企画・準備する側でもある。以下で語るA氏（40代男性）もその1人で、2011年2月20日に2時間インタビューを行った。すべてレコーダーに録音し、筆者自身がトランスクリプトを作成した。

他の研究ノートでも同じフォーマットを用いているが、2節以降は、最後の節を除いてトランスクリプトの記録であり、本人の言葉を用いている。これは、動画やブログなどで見聞できる活動家達の「主張」よりむしろ、そうした主張の背景にあるものを紹介するという眼目による。極右運動の主張は、全体としてステレオタイプの事実誤認に満ちており、賛否を問う以前に社会科学的事実検証にたえうるものではない（しかも当人たちはそのことに思い至っていない）。だが、それを「ヘイトスピーチ」「妄想」と切って捨てるだけでは、社会で「普通の人」として生きる活動家たちがなぜどのようにして運動に関わったのかは捨象されてしまう。

社会学者としては、「ヘイトスピーチをヘイトする」だけに留まらない考察をする必要があるのではないか。そうした動機を持って研究に着手した。そのため、極右運動を遠巻きに見るだけでなく、その肉声を集めて分析しなければならない。同時に、こうした調査をする研究者は少数しかいないし、属性によって調査拒否されるコリアンの研究者も現に存在する。そうした条件を勘案して、肉声を可能な限り生に近い形で掲載する必要があると考えた。もっとも、在特会

¹ ここでは排外主義を、「外国に出自を持つ集団をことさらに敵視すること」と定義しておく。

² ただし、1万人といってもメール登録すれば会員としてカウントされ、会費の支払いや個人情報の開示といった義務はない。そのため、会員というよりは登録者が1万人超といったほうが正確な表現となる。

の活動家はほとんどが偽名を用いているため、プライベートなことに関わる質問は極力差し控えねばならなかった。それに加えて、筆者の関心にもとづく質問に限定したため、必ずしも活動家に対して考えられる包括的な聞き取り記録とはなっていない。そうした限界はあるにせよ、掲載する価値はあると考えて1人につき研究ノート1本をあてることとした。読みやすさのため内容が重なるように順序を入れ替えた部分、カッコを入れて補足した部分はあるが、活動家（本稿でいえばA氏）の言葉をそのまま再現するようにしている。ただし、個人が特定されるような語りの部分は削除しており、名前を挙げて良いという人については事情通が読めばわかる程度の書き方にしてあるが、名前や地名、固有名詞は記号化した。さらに、気分を害する人に対して忸怩たる思いを持ちつつも、差別語や穏当でない表現も含めてそのまま掲載することにした。

2. 「外国人」「政治」について

《外国人との関わり》

生まれたときから周りには在日もいっぱいいましたし、部落民もいっぱいいましたし、そういう環境のなかで育ちましたね。そういう意味では違和感は全然ないですね。彼らが何か問題起こしても、それも全然違和感ないですね。同じ人間ですからね。当然犯罪もやるだろうし、みっともないこともやるだろうと。間違っても韓流にはまっている人みたいに韓国人はすばらしいとかね、そういう視線はまず持たないですね。ただ普通の同じ人間として、文化の違いも人間としてみる、それだけです。

《政治への関心》

ありましたけど、正直に言いますと、私本当に日教組のおかげで素晴らしい反戦思想を持つ少年でしたんで、軍隊は良くないとか、その割には特攻隊にあこがれたりしてちょっとアンバランスがあったんですけど。

もともと歴史好きだったんで、戦争良くないと思いつつながら戦前の大日本帝国の版図みたら、おお広いとびっくりしたりですね。それはすばらしいですよ、北緯50度から赤道まで日本なんですからね。それ見て子どもの少年期とか青年期の人間は興奮しないわけがない。もしこの状態のまんまだったら、グアムとかサイパンとかパラオもパスポートなしに行けるの、とそんなことをしつつ思ってしまったんですね。あとは満州とかもですね、範疇で日本の支配が及んだところとかで色がついているわけですね、それもそうですね。

いやー、満州とか旅行できたら楽しいだろうなってね。反戦というか戦争良くないと思う傍ら、そんなことしよっちゅう思っていたんですね。

（でも）基本的には戦後教育の申し子みたいなものでしたね。それは社会人になっても基本構図は変わらず、十数年前までですね。ですから、その辺で自分のなかで、いわゆるパラダイムシフトがですね、大きな変換があったときに——誰かが言ってくれたんですけど——それまで左に思い切り洗脳されてたから、その分ね、思い切り右旋回したんだろといわれましたけど、その通りだと思いますね。

《投票行動》

（選挙には）行かれてましたよ。恥ずかしながらね、あの当時ね、当時は社会党とかに入れてたんですね。今から思うとね、本当にタイムマシンに乗ってその自分を殴りたいですね。ほんつとに。

共産党にも入れていたことがありますからね。東京都、石原知事ですけど、石原知事に投票したのは二期目からですね。一期目は違う人に入れましたからね。

拉致問題の後ですね、自民党に投票するようになったのは。それまではダメでしたね。リベラルはいいことだと思って左系の議員とかに入れてましたね。考えたら本当に恥ずかしい。ただ一つだけ救いがあるのは入れた人全部落ちたんですよ。それはよかった。通ってたら私、今本当に頭丸めてたかもしれないですね。

3. 活動につらなる態度変容

《拉致問題》

決定的だったのは8年、もう9年前ですね、拉致が発覚したあの年ですね。あの年に自分のなかではっきりとあの舵が違う方向にガチャッとされたのを感じましたね。今までヨイショしてきた北朝鮮とか、中共とか、ああいう国がいかにとんでもない国か、北朝鮮を一つのモデルとしてみて社会主義国家とはどういうものか、ということですね。で、その社会主義国家につながっていく周辺の国々ですね。

要するに日本は戦勝国に囲まれていて、事実上やりたい放題されている状態なんですけど、まあ戦勝国側の理屈がいかにてたらめか、でたらめといたらあれですけど、事実との乖離がすごいということですね。

それは日朝問題だけではなく、日露問題でもそうです。当然ながら日中問題ですね、同じ構造がみえると。ひいていうと日米関係がそれがある。同盟国だから、日本に安保で軍隊駐屯させるからといって、全幅の信頼をおいていいかと思ったらそうではないと。確かにパートナーとしての可能性はあるけれども、やはりな

んといえますかね、独立国として言うべきところはあるんじゃないか。まあ、それがあればなおのことですね、日米同盟というものもしっかりと継続できると思うし。まあちょっとその辺話がそれましたけどね、そういう感じで自分のなかでガチャっと、本当にこう音が聞こえたわけではないんですけどね、確かにパーツと切られる感じはありましたね。

北朝鮮というのはひどい国だというのは前々からわかっていたのであって、日本で朝鮮半島の歴史の深いところで自分が気がついてなかった部分というのを知ったというんですか。

（そうした変化が生じたのは）私の中（で）の話です。ただ話を聞くと、私以外にもあの9.17が大きなターニングポイントになった人が結構いますね。それはそうですね。それだけ海外でもドバドバ報道されたことですから。しかもそれまで、拉致はでっち上げだっていう風なことが言われてたし、報道も少なかったですから。だから日本の国内でもちょっと左の人が多いところでそんなことを言おうものなら、お前は何かにだまされるぞ、とかボコボコにされるとかね。

《拉致から在日へ》

在日と北朝鮮はイコールの部分はかなりあるわけですね。総連というのは南側の人間もいっぱい入っているわけでございまして、民団ともけんかしたり続けてますけど、基本的には同じ穴のムジナと言う感じですね。北朝鮮の問題、北朝鮮が主張していること、その辺を突き詰めていくと結局は朝鮮半島と日本が関わってきた歴史が出てくるわけでありまして。その中の負の遺産として現在日本が抱えているのが在日朝鮮人という問題だと思うんですね。だから、朝鮮総連系の在日韓国朝鮮人っていうのは、やはりすべて北朝鮮の中央政府の意向で動いているわけで、その傀儡として在日を監視しているのが朝鮮総連なんですよ。

だから北朝鮮が崩壊すれば、在日社会には大混乱が起きるわけですよ。恐らく暴露合戦なんかは始まるし、壮大な内ゲバが始まって、それこそ殺し合いレベルに発展するのかなり起こってくる。民団だって無傷ではおられなくて、これまで日本に対してあんなにこたえてきたことがひっくり返されるようなことがあって、民団の中でも大混乱。だからすべての根源が北朝鮮にあるけれども、末端というのは日本における在日を含む朝鮮系社会そのものになるということですね。

実際に北朝鮮の拉致問題について調べていくと、二言目には日本人も昔、そんな数じゃおさまらないくらいの朝鮮人を連行したと後になって話になるわけで

ですよ。それに対しては韓国も同調していているわけなんですけど、調べてみたら何のことはない、渡航制限しなければならぬほど朝鮮人がいっぱい日本に押し寄せてくるということがあるわけですよ。

その時にうちのじいさんの話として親から聞いてきたのは、当時うちのじいさんが運送会社やって、今と同じですよ、道路の現場とかいくと数は減りましたがね、南アジア系とか中東系の出稼ぎの外国人いますよね。当時朝鮮人は日本人だったので、全く同じではないのでそれでも各地にそういう土方とか運送屋とかの現場に来る朝鮮人って必ず働いていた。日雇いだったんですよ。うちの運送屋も例外ではなくて、下っ端の人夫というのはみんな朝鮮人だったらしいんですよ。

その朝鮮人に教えてもらったニンニクの醤油漬けというのは我が家の家伝料理になっているんですよ。あれは風邪の時にガリっとかじると効くんですよ。ただ本当にニンニクを醤油につけておくだけなんですけれど、醤油になじんできたあたりに食べると風邪引かないんですよ。まあそういう感じでね、朝鮮人がわーっと来たりとかしてましたんですね、その辺を調べていくと強制連行・従軍慰安婦にとどまらないとんでもない話が自分の眼に入ってくるんですよ。そうすると在日社会そのもの、要するに韓国、北朝鮮、朝鮮総連、民団、在日韓国朝鮮人と分けるよりは一つの塊として捉えたほうがわかりやすい。実際につながってますからね。8年前の9月以降は、そういう方向で確立しましたね。

《反北朝鮮が嫌韓に至るまで》

朝鮮半島のことを調べたら、韓国の言ってることも、韓国のやってきたことも、とんでもないことだっということがすぐにわかりました。たとえば竹島——拉致を問題にしてるけど——韓国だって竹島の周辺でいったい何人の日本人漁師を拉致して韓国に連れて行って…。うち何人かね、拉致されるときに殺されたりとか、現地で死亡したりしているわけですよ。だから、そういう韓国の言ってることやってることも、まあ本当タイムラグですぐ、（ひどいもの）思うようになりました。

反北朝鮮というよりは反朝鮮半島的な空気っていうのが、あのタイミングで思い切り醸成されたからですかね。私の中でもそうですし、同じような思いをした人間がかなりいると思いますね。多分その流れを決定付けたのが、その3年後に山野車輪さんが出した『嫌韓流』ですね。あれでもう、南北朝鮮もろともとんでもない。それくらいの頃ですかね、もうちょっと

前からありましたけど、そのぐらいの頃から左翼系の市民団体が露骨に韓国を擁護するような発言とか行動が目立ってきたのも、多分その頃だったんじゃないかと思いますかね。

《「在日」の焦点化》

(在日にこだわるのは)戦後問題は在日問題に集約されるからですね。朝日新聞の西本記者が見事な推察をしてくれたんですけどね、集会に集まった人の顔ぶれをみると、戦後問題に対して異議を唱えている人が多いんですが、テーマはここに集まった目的は在日特権の問題であると。つまり在日特権の問題は戦後問題の象徴的な側面があるからです、と引いてくれたんですね。

やっぱり今言われている基地の問題にしたって何にしたってすべて在日問題につながるわけですね。逆に言うと GHQ が在日という楔を日本に打ち込んで、去っていったということですね。要するに再び日本が強い国にならないためには何か楔が必要であると。その楔に選ばれたのが在日であって、いう感じですね。結局は在日という存在を残しておけば日本の足を引っ張ってくれるという目論見があったのかどうかは知りませんが、事実そうなんです。

とにかく入管特例法を廃止して——在日問題をこのままでは、在日 100 世、200 世まで登場して、永遠に未来永劫に日本にたかり続けるような存在を認めてしまうことになる。それには絶対に特別永住権、いわゆる入管特例法による特別永住者を一日も早くなくして他の外国人のように一般永住者として扱う、そうすることによる効果は計り知れないと。逆に言うと、今それをやらないと今でさえほとんど鉄壁の状態になっているのに、これを放置しておくともう日本は二度とこの問題に着手できなくなる。だから今やらなきゃいけない、遅すぎたけど今やらなきゃいけないとそういう考えです。

(「在日特権」は) 社会の中での共通認識として共有されてなかったということですね。メディアの環境も違いますし、今だったらこんなのがありますって一言いけば一瞬にして全国に広めることができますけどね。伝達手段が個人ではできなかった時代には、それは難しいですし、入管特例法の問題にしたって 10 年前にやろうとしたらそんなに賛同者が集まらなかったと思うんですね。そこから説いていかなきゃいけないわけです。このタイミングで出たのはやむなしという感じですね。

私自身は在日韓国朝鮮人が一般永住者になって、法律を犯さずにちゃんと税金も納めて過ごしていく分

には、別に「いたけりゃいれば」という、その代わりに「余計なことを言ったら帰って下さい」という立場ですね。ただ、犯罪とかやった人については厳しく強制送還を含めた措置をするべきであると。在留資格というのは一代限りで、二代目からは永住資格ほしかったらそれなりの努力をしてとってください、とれなかったら帰ってくださいというのは変わらないですね。今の在日の状況をみたら、特永³が廃止されたところで普通に暮している人はまず叩き出されることはないですよ。叩き出されていることが見えている連中がどういう連中かを考えると、在特会の主張につながっていると思いますね。

4. 政治的社会化の過程

《歴史修正主義との邂逅》

(拉致問題以前には) 見ましたが、残ってなかったですね。自分が関心もって見ないと記憶には残らないですから。だから、『ゴー宣』なんかもそれこそあれですね、90 年代に書かれたものを 2000 年代に入ってから読んで感じてですね。ただありがたいのはね、『ゴー宣』とか今図書館にありますんでね、読みたいときにいつでも読めますんでね、そういう素晴らしいところはありますね。ただ、それだけでは『ゴーマニズム』に悪いので、最近の天皇とかのはちゃんと買わせていただきましたよ。

在特会以前から(活動を) やってますね。それがあればこそ在特会に入ったというのもありますね。拉致問題以前からぼつぼつとあったんですけど、本格的には拉致問題以降ですね。9.17 以降に私はむさぼるようにその辺を調べて、本を買って集めて、まあ勉強したといたらあれですけど、見ましたね。

なんていってもネットでいろいろと昔の写真とか、報道記事とか見るようになって、韓国——当事の大韓帝国の李完用首相の言動とかですね、政治思想とか見る機会がありまして、すごい人だなと思ったんですね。自分の国、要するに自分の国民を守るために、民族というのを守るために国を捨てた。国に決別した、あの決断は本当すごいなと思いますね。で、日本もそれに対して礼を尽くして朝鮮半島を近代化させ、王族については華族扱いで、日本の皇族に準ずる地位で遇したんですね。で、一進会ははじめとする朝鮮半島の改革派の人びとに対しては、それなりの要職を与え、かといって報復的に王朝派の併合反対派の人間を弾圧したわけでもなく、等しく朝鮮半島の民生向上に努めたんです。本当にそういったこともネットで初めて知った

³ 特別永住資格の略。

んです。それまでそういうことと言われてて、どうい
うんだろうなどは思ってましたけど、基本的にはもう
全然気がついてなかったですね。

《人権擁護法との出会い》

かれこれ6年前ですね。ちょうどあの、6年前の今
頃ですね。古賀誠、当時の自民党元幹事長が部落解放
同盟のバックアップで人権擁護法案を国会に強硬提
出しており、党議拘束をかけて強行採決しようとした
のが頓挫したのですよね、あの時に。その人権擁護法
をキーワードに自分なりにいろいろ調べましたらで
すね。これはとんでもない法案だった。

もともとあれなんです。そういうことが結構好
きだったんで、その前に舞台を、小劇団で舞台をや
っていたりとか。そういうエンタメ系のことが好きだ
ったんで。

丁度ですね、タイミング良くというというか、私は、
友人と自主制作映画を趣味でやっております、それ
がどういうストーリーかという、元在日韓国人の政
治家がさまざまな妨害にあいながらも、自分の初心を
貫いて、そして朝鮮総連—映画の中では朝鮮連盟—
その朝鮮連盟と戦っていくというお話だったので。
その時に冒頭です、**「朝鮮連盟は参政権を求める」**
とかですね、**「差別と闘う」**とかっていう張り紙を出
して、その議員がびりびりに破いて足で蹴飛ばすとい
うシーンを入れたんですよ。

最初（作っていたの）は、ファンタジーというか荒
唐無稽な作品ばかりです。どたばた系ですね。そう
いうのはあれでしたけれど、いつの間にやら社会派み
たいと言われてますけど、あくまでフィクションであ
りファンタジーですから。あくまで北朝鮮やら朝鮮総
連やら在日やらをテーマで扱ってるだけで、それを啓
蒙するためのものじゃないですね。

どこの団体ともしがらみなく。朝鮮ヤクザのどうし
ようもないチラシとかですね、そういう映画を作って
まして。その中ではヤクザが刑事に酔っ払って絡まれ
てですね、お前が売っているのは北朝（鮮）のものだ
ろ、とかそういうせりふをバンバン入れて、それが一
部でマニャックに受けたんで、調子に乗ったりしてい
たんですね。ただ、それが今日につながるとは、その
時点ではまったく思わなかったですね。

（それを受けて人権擁護法について）もしこんな法
律ができてしまったら、逮捕とかそういうのはないっ
て調べてましたんですが、それよりも怖いのはやっぱ
り自分達が作品を発表できなくなる。不用意にそう
いうことを発表すると、どんな嫌がらせがですね——法
律的な根拠があるわけですから、人権委員会が認めた

ら差別で賠償金払いなさいといわれるわけですから
ね。そういう一個人をも追い込めるような法律ができ
ちゃうと、これはまずいと思って人権擁護法案の反対
運動からスタートしまして。で、当時はまあ今みたい
に Youtube もありませんし、SNS だってミクシィが
始まったばかりでそんなにまだ普及してなかったで
すね。だから、2ちゃんねるのスレッドを使ったりとか、
まとめサイトでブログを作ったりとか、そんな感じで、
限られた手段の中で必死にやっております。

《従軍慰安婦について》

残念ながら恥ずかしながら、従軍慰安婦のときはあ
まり関心持ってなかったですね。だから、もしこれが
事実であるならばそれはいけない、というぐらいの
認識でしたよね。国家間の中で解決した問題を今出す
のはどうなのかな、というぐらいの認識でした。だ
から、逆に言うと私はそれなりに顕著にかんじるよ
うになったのは、そういう状態だったからその当時はあ
まりそこに関心がいかなかったからかもしれません
ね。今世紀に入ってから、それまで左翼系の団体は
韓国ってアメリカの傀儡政権という見方があったの
ですけど、今完全に韓国って（味方だと）やってます
よね。その辺の流れはあの辺で加速したんじゃないか
とも思います。

5. 在特会以前の活動

《人権擁護法反対のための活動》

ネットでは、まあねえ、いろいろと調べて自分の考
えみたいなものは形作られていったと思うんですけ
ど、いわゆる市民活動とかそういうものっていうのは、
本当に無縁でした。だから、人権擁護法が本当きっ
かけですね。

6年前のちょうど今頃ですね。例の人権擁護法案の
提出等があり、それでネットで知り合った人から「実
はこんな集会があるんですよ」って反対集会のことを
教えてもらってそこに行って、そこでいろんな人と会
って、それでいろいろな人がいるんだと知って、その
後にネットでビラ配りやってるのを見つけて。

（ネットへの書き込みは）しました。それもネット
で2ちゃんねるでもそうですし、Yahoo!掲示板とかあ
あいうところなんかで、自分の意見書いたり、知った
情報を載せたりとかしてましたね。リアルな活動とし
てはビラ配りに参加したのが最初ですね。

（人権擁護法案についてもネット上で教えてもら
ったのか）そうです。最初はぼんやりとあまり下品な
ことを書いたら怒られるよという程度の認識だった
のですが、調べれば調べるほど。その法律ができてす

ぐどうこうなるんじゃないんですね。どういいますかね、コモドオオトカゲの唾液のように後でじわじわ効いてくる。最初はとりあえずこんなところでよ、とだんだん条件厳しくしていった最後はがんじがらめにしてしまう、そういう感じじゃないですかね。

(参加してみて)いろいろな人がいろいろな関連する団体があるって知って、さらに調べたら人権擁護法案に関して街頭でのビラ配りやっているのを聞いたんで、そこに連絡して参加するように。(行動することについて)まったく抵抗はないです。もうすんなりと。

人権擁護法案のグループの時は、いつの間にか真ん中に近い立場になって、その中でビラ配りプラス街宣もやろうって話になって、街宣みたいな方に入っていたりしましたけど。あの時ね、選挙男っていたんですよ。平成17年の選挙の時ですね。立候補した〇〇さんという人。あの時ちょうど電車男がドラマでブームになったんで、それにぞらえて選挙男ってできたんです。議員候補はどこで街宣やってもいいということだったんで、ちょうどその選挙を利用するわけではないんですけど、街頭で堂々と人権擁護法案について反対意見を述べよう、というそういう試みだったんですよ。

もちろんメディアはそこは一切報道せずに、彼が言っていたもう一つの主張ですよ、このネットの時代に選挙期間中のブログ更新とかできないのはおかしい。また、政治家に対して電子ツールを使って意見を述べたり意見を聞く仕組みをもっと法律的な裏づけをとらなきゃいけないということをですね、街頭で言っていた。そこばかり報道されてましたけど、主題は人権擁護法案だったですね。

本当に反対する有志が集まって、形としてはグループでやっているように見えますけど、全体としては取りまとめている組織ではなかったですね。ちょうどその年の衆議院選挙のときに、皆で小泉直突とかって名前勝手につけて、それで小泉首相が来るところに応援演説に皆で押しかけてやったんですよ。その時に××かどっかでやるよというので行ったら、初めての方が何人かいらして、現場にいたのが初対面の方3人で折角だからちょっとお昼でも食べに行きましょうかといったら、警官がぱっときて要するに職質されたんですよ。そのときに「あなたたちはいつから一緒に活動しているんですか」と言われたんで、「15分前です」。警官が一瞬「なめんな」みたいな顔になったんですけど、事情を説明して「掲示板で呼びかけやって集まったんで、私が呼びかけたんでもない、彼が呼びかけたのでもない、他の人が呼びかけた、呼びかけたのは別

にいてここに集まったのがこの3人であって、だから今日初めて顔合わせたので、どこに住んでいるのか名前とか全く知りません。だからいつから一緒に活動しているかといわれたら、15分前からとしか言いようがないんですよ。個人としてはもっと前から活動しているかもしれませんが、3人でやったのは今日の15分前です」。まあ、何とか納得してましたけどね。

6. 在特会での活動

《邂逅》

5年前ですね、在特会の前身となる東アジア問題研究会の集会に出まして、その後、発足集会のときに声がかかりまして、それから今日に至る、そんな感じですよ。

まさに在日特権を許さない会を設立しますと、その時の集会ですね。発足集会の時には人数を限定していたんで、事前に集会参加を申し込んだ人以外は入れなかったんですね。合言葉じゃないですけど、名前と一つ申し込んだかを確認したりして、結構厳重にやりましたよね。それで翌年(2007年)の1月からスタート。だから発足集会の後、名簿とか全部破棄しているんですよ、それで改めて申し込みを募った。だから申し込むのが若干遅れたんで、会員番号は68番なんですよ。本当だったら20番以内に入りたいんですけど。それでも68番って相当前のほうですけどね。今は一万なんぼいっていると思いますが。番号は抜けていった人も入れてますから、今新規登録する人は一万台超えてますね。

《共鳴を得られた背景》

情報的なインフラができてたということです。5年前ですと従軍慰安婦とか強制連行を信じてる人は、一般レベルでもかなり低くなってきてますし、少なくとも政治とかに関心を持っている人に限ってみれば、まずほとんどの人が信用していない。一般の何も知らないノンポリ層だといわれたら、「あ、そうなのか」というくらい思うけど、そんなに詳しくは知らない。左側の「(従軍慰安婦が)あった」という人はわかっててうそを言っているか、本当におめでたい人かどっちかですね。そういう状況であったから、あれだけ人もわ一つと来たんじゃないんですかね。いきなり500人くらい。それから亀足でしか増えませんでしたけど、それでも500人集まったわけです。

《「行動する団体」への転換》

その年(2008年)くらいからその(直接行動の)回数が、まず福祉給付金の問題がありましたんで、△

△で街宣やったりとかデモやったりとかやりまして。

ちょうどその年に長野のあれ⁴があって、それに在特会の会員も多数参加して、長野の時期も会員数増えたんですよ。あの時に、抗議活動をやった団体のひとつとして認識されたんですよ。それでチベットの問題に関心を持った人が、在日特権の問題に関心があるのと限りなくかぶっているんですよ。ですから長野の事件も1つの会員数を増やすきっかけになったと思いますね。実際に長野の動画にうちの会員いっぱい映っているんですよ。当時の事務局長なんかも、長野で日の丸もって機動隊ともみ合いになっているところが動画で堂々とでかかと配信されてました。

（街頭行動への転換について）どこで線を引くかは難しいのですが、やっぱり（2009年の）カルデロン問題じゃないんですかね。あれがやっぱり、大きく行動する団体として確立したとこだと思いますね。もちろんその前にも国籍法の問題とか、前の年の暮れに国会前で抗議活動をやったりしましたし、日比谷の野音で集会やったりしましたし、そういうのはありましたが、まだ語る段階、議論する段階というのは、主張段階というのはあったと思います。行動そのものが100%目的であり手段となったのは、カルデロン問題からですね。それまでもそういうのは確かにありましたけど、完全に活動団体、実際の行動する団体としての脱皮をしたのは恐らくカルデロン問題の時だと思いますね。特にカルデロンのり子の地元の蕨でデモ行進をやったとき、あそこでがらっと変わったと思いますね。

それまで、何回メディアにこういうことやりませんか取材してくださいと言っても、誰も来なかった。左翼団体も我々があれだけでかかと告知しているのに、妨害はおろか脅迫メール一本来なかったんですよ。ところがカルデロン問題のときにはどこで誰が拾ったのか知らないけど、「とんでもない団体が蕨に押しかけます」みたいなやつがネットで流れまして、実際に行ってみたら本当に蕨の駅前で彼らが集まって横断幕とかで構えてたんですよ。実際にデモの開始前に横断幕焼くっていう妨害もありましたし、デモ隊に粘着して反対側の歩道で道行く人に「差別団体です」とか言って。そういうのをやっている人があったりとか。もっと後ろのほうになってくると、スケボーで殴りかかったりとか、埼玉県警の警備のずさんさもあったんですけど、本当にあのときは一体ここは日本かというくらいの妨害を受けまして、デモも確か30分くらいで終わるはずのコースだったんですが、1時間く

らいかかったんですね。というのは、妨害あるたびにデモがストップして…。

《直接行動に対する抵抗感》

みんなその辺は抵抗があったみたいですね。ただ、カルデロンの頃にはみんな慣れていたんですよ。最初に人権擁護法案があって、前々回の参議院選挙のときに自民党前に抗議活動にいったんですけど、その時に私は帽子かぶってサングラスかけていたんですよ。それが無駄な努力なことがわかって、まあいいやという感じで。

7. 活動の効用、活動を通じた変化

《良かったこと》

自分ひとりではできないことを、団体に入ることによってみな力でやる、というのが一番大きいですね。たとえば今日のデモなんかでも、自分ひとりではできませんからね。実際に・・・⁵でプラカードもって拡声器持って歩いていたら、たちどころに警官に押さえられますから、ちゃんと組織としてデモを申請して、集会場所を決めてやっているからこそできるわけであって。それと自分達に共感して新たに参加する人が日々絶えないことですね。これは大きな部分ですね。

保守系という大枠でいうと人口はかなり増えたんですよ。そういうところは嬉しいですよ。自分に直接何かの利得がなくても、全体として何か動きができれば、それほど嬉しいことはないですよ。また、自分の名前で検索すると、一個一個見るのが面倒なくらい件数が出てきますけどね。そういいながら毎日自分の名前を入れてにやにやしているんですけど、自分に共鳴して参加した人がいて、その人に共鳴して参加した人がいる、というこの玉突き状態は本当に嬉しいですね。

《活動を支えるエネルギー源》

なんといっても会長が最後まで弱音を吐くことなく前に進んでいる姿ですね。トップの威力ってすごいと思いますね。それが今、各支部の支部長とか本部の中心メンバーとか、そういう人たちに対象が広がってきて、みんなが桜井化して行って、私もそうだと思うんですけど。もちろん、皆一般の社会人なのでやれる範囲は限られているんですけど、そのなかで活動しているというのはありますね。そこは本当にみんながみんなを支えている状態になってきてますね。

その根底には、冒頭申し上げましたとにかくこのま

⁴ 北京五輪に際して長野で行った聖火リレー。

⁵ 録音記録で理解不能だった部分だが、場所の名前を指していると思われる。

までは日本という国が、自分達の共同体がなくなってしまう、抛りどころがなくなってしまう、それを何とかして阻止しないとイケないと。だから抗議するのも周知するのも、実際の活動、集会をやって議論するのも、すべてそこに帰結すると思いますね。参加者の面々もさまざまです。私のように靖国神社に毎月参拝する人もいれば、神社の作法とか知らない若い子もいるんですよ。でも、基本的には日本という国が好きで、自分達が生まれ育った日本という国、日本という共同体を守りたい、守って子孫に伝えたい、その思いです。だから、外国人参政権の問題もそこに帰結しているんですよ。

安政条約とはニュアンスが違いますけれども、安政条約で日本がとにかかく困ったことは、治外法権を認めたこと、治外法権によっていわゆる租界が、ああいう町が形成されて、そこへ日本の公権力が何も手を出せなかったこと、それと関税自主権の問題ですよ。だからその治外法権撤廃させるために、明治政府は戦争を経たりとか外国と同盟結んだりとか、それこそ本当に国の浮沈をかけた努力をしてようやくそれを撤廃したわけですね。そして21世紀になってなぜこれを自分たちの方から放棄して外国人に門戸を開いてしまうのかということだと思えますね。

治外法権とはニュアンスが違いますけど、基本的には外国人に権利を与えると、当然、外国人を特別扱いしろということにお墨付きを与えることになって、まあ実際ね、チャイナタウンとか一部日本人が怖くて入れないエリアなんかもありますので、そういうのが全国的に形成されてそこには公権力が及ばない。外国人に票が与えられるとそこは組織票となってその利益代表者が地方の政界に入ってくると。これどう考えてもおかしいというか、危険ですよ。で、日本を守りたいという気持ちは外国人参政権に反対する気持ちとイコールになると思いますね。

《活動により得られたもの》

自分としてこういう情報を世の中に広く知らしめることが——もちろん、まだまだ不十分だと思いますけど——ある程度のアナウンス効果を成し遂げたってことは嬉しいですね。

在特会と直接関係ないようであるんですけど……少しぐらい高くても日本の国内産のものを食べよう。残念ながら、私はわかめ大好きなんですけど、国内でわかめの名産地というと小沢ちゃんの岩手か、仙谷ちゃんの徳島なんですよ。まあでも徳島岩手の漁業関係者の方に罪はありませんので、もしかしたら仙谷さん、特に岩手の場合はね、小沢さんの票をまとめているか

もしれませんが、岩手のわかめもおいしいと食べているんですけどね。

地産地消ということに……。やっぱり気がついたらこの活動やって今があると思いますけど、ニンニクとかでも安ければいいというものではなく、シナニンニクをいただいていたんですが、最近はまったく。少しづついいものを買えばいい。外食に比べれば全然安いですからね。後でついてきた結果ですけど、そこらへんはあれだったかなーと思いますね。ただ、着るものに関しては輸入品に国産製品は思い切り負けてますからね。メイドインベトナムとかメイドインタイランドを選びます。

《在特会以外の人との付き合い》

まったく別ものですね。もちろん身の回りの人間にも啓蒙活動を、ちょっとトーンを抑えてやってますけど。それでも、露骨に在特会の活動を私生活にリンクはちょっと厳しいものがありますので、それは適宜相手の反応を見ながら話す範囲をやってますけど。日常生活の中でもいけないことはいけないとは言って、一昨年の民主党に政権交代しなければ日本はよくなるということ、うるさいほど言ってくれた方をいじる毎日を楽しんでいますね。「あなた、民主党に入れるっていったけど、入れたらどうなったの」って。「何ですかね、民主党に入れる入れるといったのは」そんな感じですかね。

《靖国神社への参拝》

(参拝するようになったのは)ちょうど8年前くらいからですね。拉致問題から1年ほどおいて、ちょっとあるうさんくさい神職に出会ったんですけど、その人がやっていることは滅茶苦茶だったんですけど、言っていることはすごく説得力があつて。靖国神社というのは祀られている神様が私たちとほぼ同じ時代——100年くらいの時代のタイムラグというのは、長い歴史でみればどうってことない時間で、あそこに祀られている神様は、自分達にもっとも近い人たちで、その感謝の気持なんか一番喜んで受け取ってくれる神様だつて言っていて、そうすると自分の願い事も聞いてくれる確率が高いのではないかと。

と、いい加減なことを言ったんですけど。でもそれがなんか私に響いて、そこで自分の祖父の代くらいの人があそこに祀られているわけで、自分の身内なんかでも出征して皆さん無事帰ってきてましたけど、帰って来れなかった人もいる。そういう人たちが祀られているところになぜ今まで行かなかったんだろう、という気持ちになる。それですぐに行ったんですよ。それ

から毎月行ってます。ちょっとこのところ1、2ヶ月あれなことがありますけど、何かの締め時には必ず行きますね。

8. 外国人参政権について

当然ながら、外国人参政権の反対はそのちょっと前からありましたね。やっぱり政治はその国の国民のものだという、ましてや日本というのは帰化というシステムがあって、本人が望めば国籍も取得できる。それでなぜ外国人に参政権を、というのは舵きり⁶が変わる前からありましたね。舵きりのあととはなぜとかそんなレベルを超えまして、参政権を要求する奴らってのは、もし法律がなければバットで殴り殺してやるとかね、それくらいまで過激に思うようになりましたね。

もっと若い頃なら、当時はメディアに出ている人間も簡単にだまされてしまって、税金を納めているのだから参政権がないとかわいそうだなというのは若い頃にはありましたが、それはもう10年以上前に飛びまして。参政権イコール国籍だろうといのは十数年前から思ってます。で、9.17自体は自分の考えにお墨付き与えた感じですね。

どの民族にも自決する権利があると思うんですよ。第一次世界大戦の時にアメリカのウィルソン大統領が提唱した民族自決ですよ。その観点からしても、日本の政治っていうのは日本国民が決めるべき問題であって、外国人がそこに関与する余地はないという風に考えています。

で、いろいろ問題はありますが、それはその人その国で出生させた親の問題であり、またその国の中でどういう仕組みを持って自分が政治に参加できるのか、というのを探っていけば選択肢はあるわけですよ。その国が一切の外国人の帰化を認めていないのであれば、それはしょうがないですね。その国に生まれたことによって生じた不利益ですから。その不利益がいやであればその国を退去するしかないと思います。もしその国で国籍をとれば政治に参加させるシステムがあれば、そのシステムを利用するかしないかはその人の自由であると。で、もしシステムを利用しない場合はそれによって得られる利益も放棄したのと同じであって、これが多分世界的なスタンダードな考えじゃないかと思えますね。

実際外国人参政権を認めてる国ってごく一部の国に限られる話ですし、その限られた国でもかなり厳しい条件付けてますよね。韓国なんか参政権をもらおうと思ったら大変ですよ。永住者でしかも税金なん

ぽか納めていて・・・⁷でもね、結婚した場合には永住権を与えるのはごく普通であって、日本の場合はもう無条件ですからね。特別永住資格があれば、その特別永住資格が代々相続できるわけですから。永住資格がある程度の条件があったらまた話変わってくるんですけど、無条件ですからね。事実上在日に生まれれば無条件に選挙権がもらえるという制度ですよ。そういう風に捉えてますんで、そこはちょっと他の外国人との公平さでも問題であるし、永住者というだけで外国籍の人間に政治に参加させるっていうのもこれも大きな問題であると思えますね。

やはり結婚したりとか何らかの形で永住者っていう、永住者へのハードルは日本より高いっていう感じですけどね。・・・⁸それは親子代々受け継げるものなんですか？ただ対象となる数が全然違いますよね。こちらは何十万人で、向こうは何千人もいないんですよ。基本的にはその国の政治っていうのは国籍を持つべきものだと思ってますので、仮にそれがあっても・・・。

北歐とかにしたって、やっぱり相互主義ですね。・・・⁹仮に日韓の間で相互主義を導入するとしたって、国境紛争を抱えている国で相互主義もないだろうというのがありますね。いずれにしても国の数でいうと外国人参政権を認めている国は少数派ですね。最近やたら参政権を叫びだしたシナ人の社会ですよ、でも中華人民共和国は外国人には一切参政権が、選挙権そのものがない国ですからね。それがなぜ日本で要求するのには不思議ですし、いずれにしても国民固有の権利でバーゲンセールするものではないですね。そういう考えですね。

《在特会における外国人参政権の位置づけ》

今、一、二を争う。去年はさすがに本当に危なかったのも、もっとももっとという、かなりステータスが大きかったんですけど。とりあえずそれが落ちたわけではないんですけど、竹島の問題とかもありますし、原点の入管(特例)法の廃止ですよ。これもあります。その中でどっこいどっこのトップ集団の中に入ることには違いないです。やっぱり竹島にしたって外国人参政権が認められたら、島根県が竹島の日を廃止するという条例を作る勢力が生まれかねないわけですよ。たとえば年金の問題にしたって、参政権を認めると在日韓国朝鮮人はこれからも無年金でも福祉給

⁷ この「韓国の外国人参政権」の前提となる「韓国の永住権」については、在特会全体に事実誤認が広まっているので、筆者が訂正したのと受けての発言。

⁸ ここでも事実誤認を訂正したのを受けての発言。

⁹ これについても事実誤認を訂正したのを受けての発言。

⁶ 前出の拉致問題のこと。

付金がもらえるのを、国レベルの法律で決めてしまうのを地方から起こされる恐れもあるわけですね。

だから、地方自治だからいいっていうのは、ちょっと違うと思うんですね。日本の場合は東京都であって東京政府でもないですよ。東京自治共和国でもありませんから。あくまで日本国の東京都の部分の行政の執行を都が代行しているだけの話であって、中央の行政と地方の行政は表裏一体ですから、ましてや自衛隊の駐屯地とかそういうところになりますと、安全保障の国レベルの、国際レベルの問題ともリンクしているんで、そこに自国民以外の人間が入ってくるというのは、やっぱり危ないですね。

《なぜ外国人参政権を問題視するのか》

国としての基盤が脆弱であるというところが大きいと思いますね。独立国といえない部分はかなりあって、一番のあれは日本に事実上アメリカが占領状態ですよ。安全保障が自分でできない。治安維持にしたら、警察官がシナ人の不審者を職務質問したら逆ギレされて石灯籠で殴られそうになって、それを撃ち殺したと、彼は撃ち殺すつもりがなくて当たってしまったというレベルですけど。あるいは奈良県の方で車上狙いの車を取り押さえようとしたらパトカーにがんがぶつかってきて、それに対して発砲した。普通だったらそこまで警察官に逆らったら、射殺されてもやむなしというか、射殺しなかったら警官が逆に怒られるようなあれですよ。しかし日本の場合には、警察官を特別公務員暴行罪で告発して、それが受理されてしまう。

そういう状況で国防の問題、治安の問題一個とったとしても、これだけ日本の基盤が脆弱であるんで、そこに外国人の意見を入れさせたらどうなるかと。しかも半端な数じゃないですから。60万人という恐ろしい数ですよ。要するに、日本のなかにわざと民族問題を作ってしまったって、民族間の紛争をわざと激化させて継続させるのかといたくもなるような仕組みになってしまうんですね。だからやはり外国人には外国人の限られた権利でおとなしく生活していただく、自由の国アメリカだって政治に参加しようと思うとそれなりにステップ、手続きが必要ですよ。アーノルド・シュワルツネッガーは州知事にはなれますけど、大統領には立候補できない。だから、バラク・オバマがケニア生まれじゃないか、ケニアかどっかの生まれじゃないかというのもそれですよ。もし彼が海外で生まれていたら大統領の資格がなくなっちゃうんですね。

それくらいしっかりした基盤があれば、改めて議論

すべきかと思えますけど——議論しても私は反対の議論ですけど——これだけ国の仕組みが脆弱な状態で、要するに悪意を持った人間がやりたい放題できるのが今の日本なんですよ。日本の法律は性善説にのっかって、まさかこんなに悪いことをするやつはいないだろうという前提があるような、甘い法律が多いですから。

それとあともう一つは、多文化共生主義を取り入れた国がことごとく失敗しているというね。ドイツは首相自らドイツの多文化共生は失敗であったと発言しましたし、ベルギー、オランダあたりの外国人の流入によってどんな状態になってるかっていうのは、もうどうしようもなく知れ渡ってますし。あのゴッホの子孫がイスラム系に殺されたりとかして。フランスでもイスラムのコミュニティがフランスの社会から完全に離れて、勝手なことをやっているとかありますね。

だから、そういうのを見ると、やっぱり今の日本で外国人参政権を導入すればとんでもないことになると思いますし、仮に日本がそういった部分がしっかりしても、私は反対ですね。というのは、そういうのがしっかり国防だの治安だのしっかりした国であったとしても、外国人参政権を突破口にされて、政治の方から世の中を動かして、社会をおかしくしていくそういう方向に持っていられないというあれがありますんで。逆に参政権というのは、この日本においては少なくともこの日本という国が続く限りは、導入してはいけないものと思っています。

9. 結語に代えて

A氏の場合、拉致問題をきっかけにかなり劇的な転換を経験している。それまでは左派政党に投票していたケースは、12名中2名だけであり、その意味でA氏は相対的に大きな転換をとげたといえるだろう。

A氏の転換の背景には、大きいえば東アジアの地政学的状況がある。東アジア国籍が日本の外国人人口の約3分の2を占めるなかで、近隣諸国との火種がつかない構造は、近隣諸国に対する敵意が外国人に対する敵意へと変換される現実を生み出す。聞き取りを進めるなかで筆者が課題の1つとしたのは、本来は異なる両者が活動家のなかで結びつく論理・過程の解明であった。A氏は在日が「たかる」という表現を用いているが、これは移民研究の常識でいえば反論する気にもならないくらい事実と反している。ネットで蔓延する聞きかじりの情報にもとづく根拠のない説を信じてしまうのは、「近隣諸国」と「在日近隣諸国民」を混同するからではないか——こうした仮説を筆者は持っており、両者をつなぐものに関心があったからで

ある。A氏の場合、歴史修正主義が両者の媒介になっているといえる。

A氏にとって歴史修正主義は、単に在日外国人に対する憎悪を増幅する装置となっているだけではない。靖国神社への参拝や地産地消の試みといった形で、積極的にアイデンティティやライフスタイルを構成するものともなっている。こうした感覚は、必ずしもほかのメンバーに共有されているわけではなく、A氏が自己の深いところで転換をとげたともみることができるだろう。

そして認識上の転換を行為にまで変換させたのが、インターネットという基盤であった。最初にA氏が街頭に出た人権擁護法反対の活動では、ネットでしか知らない人同士が集まり、警察に不審がられたというエピソードまで披露している。在特会は、こうした形態の集まりに明確な目的をつけて、会のホームページ

と動画を整備することによって組織化されたものだといってよい。在特会に入る人たちの動機やきっかけ、社会的な背景には一定の多様性があるが、インターネットから活動に誘う動員構造の効果については、ほぼ全員が共通して経験している。こうした新たな動員の回路の構築については、右派が左派に先んじており、排外主義運動の出現のタイミングの少なくとも一部はこれで説明できると筆者は考えている。だが、それを学習した左派の側も動画配信などは始めており、インターネットは単に極右（ネットウヨからリアルウヨへ）を利するばかりではない。組織動員が難しくなった現代において、新たな動員構造として機能するのがインターネットであり、東日本大震災後の反原発運動が実現した大規模な動員との比較で分析することも可能だろう。

文献

樋口直人，2001，「外国人参政権論の日本的構図——市民権論からのアプローチ」NIRA シティズンシップ研究会編『多文化社会の選択——「シティズンシップ」の視点から』日本経済評論社。

———，2011，「東アジア地政学と外国人参政権——日本版デニズンシップをめぐるアポリア」『社会志林』57(4): 55-75.

松谷満・高木竜輔・丸山真央・樋口直人，2006，「日本版極右はいかにして受容されるのか——石原慎太郎・東京都知事の支持基盤をめぐる」『アジア太平洋レビュー』3: 39-52.

安田浩一，2010a，「在特会の正体」『G2』6: 76-105.

———，2010b，「ネット右翼にたいする宣戦布告」『G2』7: 270-295.

（付記）本稿は科学研究費補助金による研究成果であり、稲葉奈々子、申琪榮、成元哲、高木竜輔、原田峻、松谷満の各氏との共同研究によっている。記して感謝したい。